

(1) 名前のつけかた 2019年2月2日刊行

人類学者として、つねづね複数の文化を生きるということに関心を持っていた。国際結婚や移民の増加でそうした状況（ここではミックスドカルチャーと呼ぼう）を生きる人は、ますます増えている。かくいうわたしも国際結婚をし、自分自身がミックスドカルチャーな環境で子どもを育てるという経験の真ただち中にある。ミックスドカルチャーの子育てにまつわるエピソードを通して、多文化家族について考えてみたい。

子どもが生まれるとなった時、名前はどうか、という悩みに直面する家族は多い。日本に暮らしていると仮定すると、選択肢はおよそ9通りある。まず、姓名ともに日本名（例：民博太郎）、あるいは外国名（例：レノンジョン）のみ。次に、日本姓に外国名（民博ジョン）、あるいは外国姓に日本名（レノン太郎）。ミドルネームにどちらかの名前をつける（民博太郎ジョン／レノンジョン太郎）。両親の姓をつなげた複合姓と、日本または外国名の組み合わせ（レノン民博太郎／レノン民博ジョン）。最後に、すべての要素を合体させた総合名（レノン民博太郎ジョン）。最後の総合名は両親の文化を等しく背負って良さそうだが、長大になる可能性もある。我が家の場合は、マークシート試験の名前欄はどうなるんだろうという心配が去来し、選択するには至らなかった。



インドでは、名付け儀礼で初めて子どもの名前が披露される＝プネーで2016年、筆者撮影

(2) 国籍を選ぶ 2019年2月9日刊行

国際結婚や移民家族のようなミックスドカルチャーな環境で育つ子どもは、両親とは違う国籍やパスポートを持つことも多い。

大まかに、国籍の取得には生まれた国の国籍が与えられる出生地主義と、親の国籍を継承する血統主義がある。日本は血統主義を採用しており、日本人の親から生まれた子どもは日本国籍を取得する権利を持つ。かつては、国際結婚をした日本人女性は日本国籍を喪失し、生まれた子どもも日本国籍を取得することはできなかったが、いまは撤廃されている。

どちらも二重国籍を認めていないインドと日本の国際結婚家族である我が家の場合、子どもの国籍は当然、どちらか一方を選ぶしかない。とりあえず日本で暮らす可能性が高いこと、日本のパスポートのほうが移動の利便度が高いこと、といった実用的な理由から子どもは日本国籍を取得した。それ以外に、インドの政策も大きい。インド政府は、たとえインドに住んでいなくとも、インド国籍を持つ人の配偶者や子どもに「海外インド市民権」という法的ステータスを与えており、選挙権などを除く多くの権利を認めている。したがって、国籍がなくとも何年だろうとインドに暮らすことが可能だし、出入国も自由である。太っ腹な政策のおかげで、二重国籍ならぬ二重市民権を法的に享受できるのだ。



「海外インド市民権」の証書。なかに終身と記されている = 2016年、筆者撮影

(3) 食のあれこれ 2019年2月16日刊行

食の問題は、毎日のことであるために、複数の文化が混じったミックスカルチャーな環境における子育てにおいて、葛藤を生み出しやすいことの一つである。

宗教によってさまざまな食のタブーが存在する、ということによく知られている。代表的なものとして、イスラム教では豚肉とアルコールがタブーで、ヒンズー教では牛肉、ジャイナ教では肉類に加えて、土中で育つ植物の摂取が忌避される、といったことである。

学校給食ではそうした複雑な事情に対応することは難しい面もあり、多くのミックスカルチャー家庭では、子どもには弁当を持たせたり、特定の食品を除去したりして対応していることが多い。普段は食べられるものも、祭礼などの期間だけは食べられないということもある。そうした事情を理解してもらうことも重要になる。

さて、食べられないものだけでなく、何を食べさせるのかということも文化の違いがあって面白い。インドでは、離乳食期に入るとターメリックから始まって、少しずつスパイスを取り入れていく。赤唐辛子は避けられるものの、日本の離乳食と比べると、砂糖も塩も結構使われている。だしを基本とする日本の離乳食本を読みこんだ私からすると、なんとも受け入れがたい離乳食だった。



スリランカの母子手帳。離乳食の初期には母乳を混ぜることが推奨されている＝スリランカで2018年、筆者撮影

子どもの学校や教育法に悩むのは、どこの家庭も同じだろう。ただ、ミックスカルチャー家族にとっては、教育は学校の善しあしという以上に、どんな言語で、どのような文化のなかで育つのかという問題にも関わっている。

親は、できれば自分の母語で子どもとコミュニケーションを取りたいと願うが、日本生まれの子どもにとって、複数言語の習得はそれほど容易ではない。国際結婚は子どもがバイリンガルになっていいですね、と言われることがあるが、親の言語を「言っていることはわかる」というレベル以上にきちんと習得するためには、相当の学習が必要となる。移民家族でも、2世、3世と世代が下るにしたがって、母語が変化するのは、世界共通の現象だ。

長い時間を過ごす学校は、子どもの言語や文化の習得に大きな意味を持つ。そのため、予算さえ許せば、インターナショナル・スクールやエスニック・スクールという選択肢もある。ただ、朝鮮学校、中華学校、ブラジル学校などはあるが、まだまだ日本には多様な学校が少ない。

そんななか、昨年4月に英語でインドの教育を受けることができる、関西初のインド系学校が開校した。教師は、インド人と日本人からなるという。生徒はまだ少数だというが、新しい取り組みに注目している。



関西初のインド系学校 CSAIS 京都校の教室 = 京都市伏見区向島で、筆者撮影